

## 法然・親鸞の本覚思想批判(1)

### 本 多 弘 之

#### 一 浄土教と本覚思想

大乘思想が、一切衆生の迷没の構造を明らかにすべく、大なる乗り物たる教法を求め、遂に「三界虚妄但是心作」(十地品)という根本教証を見出した。迷妄的に現象している意識を変革するためには、分別的に起っている意識そのものを停止するのではなく、その意識そのものの本来性に立ち還って、いわば浄鏡が一切を映じて無分別なるがごとく、因縁に随順して一切の存在を映じつつ、そこに「自我」を立てる必要のない経験を得ることであるという考え方によって大乘のかかげる人法二執を超えた十方衆生平等の覺りを開く原理を開示することができた。『大乘起信論』は、その根本経験を得る時を「始覺」と称し、その始覺によって得た根本経験の意識自体を「本覺」と表現し、始覺によって本覺に同じてみれば、意識の根本構造は「本覺」の上に成立し、一切の経験もそれによって成り立っているのであるから、本覺によつ

て不覺も成立するのであるというのである。

意識の本来性乃至純粹経験に還るといふ考え方は、いわば大乘仏教思想の中心となり、大乘仏教の根本的存在把握もなっているとされるが、浄土教といえども、本質的に意識の本来性としての根本経験を回復せんとする実践的な意欲が産み出した方法論の領域を逸脱するものではない。一見すると、本覚思想が、人間は自己の意識構造の本来性を求めうるし、また求めえてみればその上に迷妄分別の生死が成立しているのだとする考え方に対して、浄土教は時を越え、場所を異にした、「彼土」としての浄土への往生を目的とするのであるから、この両思想は異質のものであるように見える。しかし、本覚思想を語る『起信論』、あるいは唯識思想を整理構築した『攝大乘論』に「浄土」が語られ、唯識思想の大成者といわれる世親に『浄土論』の著が存することは、この両思想が異質なものではなく、むしろ本覚思想の実践的系譜の中から浄土教によるその成就が積極的に語り出されていったと

考えるべきであらうと思う。

現実の経験の根本構造を自覚的に明らかにするべき本覚思想の実践の中に、何故「浄土」が説かれるかということについて、『起信論』では次の如くいう。

「衆生初め是の法を學んで正信を求めんと欲するに、其の心怯弱にして、此の娑婆世界に住するを以て、自ら常に諸仏に値いて親承供養する能わざるを畏れ、信心の成就すべきこと難く、意退ぞかんと欲するを懼れなん。當に知るべし、如来、勝方便ましまして、信心を摂護し、意を専らにして仏を念ずる因縁を以て、願に隨つて他方仏土に生るることを得。常に仏を見たてまつり、永く惡道を離る。修多羅に説くがごとし、若し人専ら西方極樂世界の阿弥陀仏を念じ、修するところの善根を回向して、彼の世界に生れんと願求すれば、即ち往生を得。常に仏を見たてまつるが故に退することあることなし。若し彼の仏の真如法身を觀じ、常に勤修習して、畢竟じて生るることを得て正定に住するが故に」。

すなわち、始覚によつて本覚と同じ、本覚において、不覺も現象していると認識しうるといふ構造それ自体は、衆生の機類の如何を問はず妥当すべき事実であるが、実践的に一人の人間が自己の意識内容を正しく本覚に同ぜしめるといふことは容易ではない。「もし衆生あり、善根微少にして久遠より已來煩惱深厚にして仏に値いて亦供養するを得と雖も、然も人天の種子を起し、あるいは二乗の種子を起す、たとい大

法然・親鸞の本覚思想批判(一)(本 多)

乗を求むるものあれども、根すなわち不定なれば、もしは進もしは退して……」というのが求道心のぶつかる課題である。しかし「不住生死不住涅槃」を求めて勇猛精進なれ、といふのが『起信論』の当相である。従つて、浄土の教えは、怯弱なるものに対する一つの方便であつて、本覚を現前に認得するまで努力せよといふのが一応の『論』の顯相である。これは『十住論』の易行の説き方にも通することであると思ふ。法然が『起信論』『十住論』を「傍明往生浄土之教」に位置づけるのも宜なるかなと思われるのである。

同じく、法然が「傍明往生浄土之教」に位置づけた『摂論』においては、浄土の説由は、この二論とは一寸方向を異にする。『摂論』では、一切唯識を成立することを得るとき、生死と涅槃とに住せざる真実の智慧を得て、果として三種の仏身を成就するとなし、その三身(自性身・受用身・變化身)の中の受用身について、「受用身とは、いわく法身によつて種々の諸仏の衆会の所に、清淨仏土を顯わす、大乘の法衆の所受のための故に」といふ。平等の法身に触れた諸仏の衆会するところに、清淨の仏土が顯わにされ、そこに「諸の菩薩を成熟せしめる」作用が象徴されてくるのである。すなわち大菩提が必然的に有する衆生濟度の用を、受用身として開設し、その作用こそ諸仏が衆会しうる仏土であるとす。この場合の浄土は、仏の果徳が自ら具足している公開性

の場であり、自在性の場である。本覚思想がもし必然的に「浄土」を具有するとすれば、『撰論』的な説示となるのが当然であろうと思われる。されど現実はこの苦惱の娑婆から初発心もて仏果への歩みを始める衆生にとっては、『起信論』的な説示がより具体性をもつものともいえるであろう。一方が果徳として浄土を顕わし、一方は初心の怯弱なる衆生の方便として浄土を開くものとしているのである。この両方を、法然は共に「傍明往生浄土之教」と決定し、「正明往生浄土之教」は「三経一論」であると示されたのである。いうまでもなく、この『選択集』教相章における法然の正・傍の決定それ自体には、本覚思想を直接批判する意図はあるまい。善導を唯一の師とする法然にとつては、念仏往生の浄土教を正しく顕わに説くものか否かが決判の基準になっていることは当然である。

## 二 無上菩提の成就

大乘仏道を実践的に体得せんとする求道者にとつて、「不住生死不著涅槃」の解脱をうるといふことは、困難至極である。観念的に論ずることは可能であるが、本覚それ自体を生きて、仏陀のごとく諸仏平等の浄土の境界を開示することを、自他ともに証誠することは、ほとんど不可能である。この永遠の求道のテーマを求めて一歩たりとも退廃しないとい

う信念を得ることが、大乘菩薩道の大きな課題となる。さればこそ六波羅蜜を修し、止と観とを双修して、凡夫と二乗を越えよと『起信論』は説くのである。(唯識論についても同様である)。「もし止を修すれば、凡夫の世間に住著するを対治し、能く二乗怯弱の見を捨つ。もし観を修すれば、二乗の、大悲を起さざる狭劣心の過を対治し、凡夫の、善根を修せざるを遠離す」と『起信論』が示すように、菩薩行の課題は、単に世務に精進して世間的価値の追求に終るのでもなく、また個人的静謐の中に閉鎖的清浄性の慰安を求めめるのでもない。この二過を遠離して、不休息の願心を持続することは、在家出家を問わず、正に至難の実践的課題である。真に不退転の信念が要求せられるのは、この二つの人間関心、すなわち個人的休安か、世間的価値(名聞、利養等)かという二つを超越して、しかも不休息の願心を持続することが誠に困難なるが故であろう。しかも、もしその二過を越えられないのならば、真如実相に相応したる真如三昧、すなわち「不住見相不住得相」という仏道の三昧の実現はありえないし、その実現なくしては、真の自在の境地には至りえない。外道のあらゆる三昧は、「皆、見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪著するがゆえに」と押えられるように、たとい修行による精神統一を得たとしても、世間の名利心が残るかぎり、純粹なる現象を映す鏡のごとき存在、すなわち本覚を自覺的に

生きて真如と相応する存在となることはないのである。

外道にも墮せず、二乗にも退転しないような信念を「不退転」と表現し、悠々たる仏法の大海に浮んで休廃することなき自覚を得たる菩薩を「正定聚」の位と称するが、大乘の精神にとつては、正覚を究竟態として求め続けつつ、この不退の位に生きることが、現世に菩薩道を生きるばあいの必須条件となる。この必定不退の信を成就するというのが、『起信論』の造論の意図の一つでもある。

浄土願生の信心が、この迷妄の意識を翻転して純粹無雜の經驗に還帰しようとする本覚的思想にとつて枢要の位置を占めるのは、論の当相からいえば、「專念の方便を示して仏前に生ぜしめ、必定して退せざる信心の爲の故」である。怯弱下劣の多数の初心の凡夫が、仏法を信受し仏道を証明する存在へと成熟していくための方便として重要であるというのである。しかし、『浄土論』の論師天親菩薩は、「如実修行」という実践問題を解決せんがために、『無量寿経優婆提舍願生偈』を製作している。「自力々他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」という大菩提心の課題は、努力意識に執られる人間存在にとつて、遙かに遠い無相離念の彼岸である。釈尊の大悲心は、一切衆生を摂化せんがために、離念無相の法界を出でて、一如を象徴する自在性・解放性を語りかけて、莊嚴世界を開示した。世親菩薩は、一切衆生の先頭に立って「世尊、

法然・親鸞の本覚思想批判(一)(本多)

我、一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安樂國に生れんと願ず」と表白する。「仏教と相応せん」とする世親の菩提心が、「修多羅真実功德相」に依つて、「普共諸衆生 往生安樂國」と要求せずにはおれないのである。『撰論』の十八円淨の仏土とは異り、天親における浄土は、願生心の内に聞こえる如来大悲心の象徴としての仏土であり、本願が創造する衆生摂化の作用の表現である。しかしその願生は、単に好適な順境を求めたのでなく、本願力の住持をえて、衆生世間を感じ、如実修行の菩薩が眞の自在を回復して、無仏の世界へ願生して仏事をなす力をたまわるような意欲をも含んでいる。

曇鸞は『浄土論註』を著わすに当つて、この『無量寿経優婆提舍』が、大乘(上衍)の極致であり、不退の風航であるという。天親の浄土願生の本意が、大乘正定聚の実現にあると見抜いたところに、曇鸞の菩提流支より伝受された仏法への眼光がある。童樹の『十住論』に依つて、「五濁の世無仏の時に阿毘跋致を求むるを難とす」といわれるのは、眞摯なる求道の伝統によつて始めて見出しうる視点である。

仏果たる無上菩提は、因位の願心に感ずる衆生において、どこまでも正定聚不退の菩薩の信念として確認せられる。その不退を感成せしめる力は、自己の努力意識にはない。若存若亡せる人間存在の意欲に無上菩提への願心を托すわけにはいかない。『浄土論』の著者天親は、不虛作住持の

はたらきを、如来の本願力に仰ぐことよって、一切の菩薩をして如実修行せしめる平等の大地を開示しえたのである。

これよって法然が、『浄土論』を「正明往生浄土之教」の「三経一論」の一に加え、経典と比肩しうる高い位置を与えた意義をいささか知りうるのである。

### 三 法然の思想的批判

本覚的発想乃至「本覚思想」の源流において、浄土教は深い内面的因縁を有し、特に実践的な大悲心成就という課題の追求に当っては、願生浄土は必然的でもあるということであろう。天台浄土教の流れの中に善導流が取り込まれ、源信僧都のごとき行者が出られたことでもあり、本覚の理念と願生浄土の信とは対峙すべきものではないはずである。しかるに、法然が浄土教を独立せしめて「浄土宗」を名のり、本覚思想の実践的理想的追求に身を止めなかったのはなぜか。

いうまでもなく、法然においては、聖道仏教に相応しえない自己を悲歎して、「三学のうつわにあらず」と表白したと伝えられる激しい求道心がある。『選択集』には『安樂集』によつて、「一切衆生皆有仏性」であるのに何に因つて自ら生死に輪回して火宅を出られないのかという問いを出している。一切衆生が平等に仏法の機となりうる道理の上に「大乘」の仏道が成立しうる。されば、成仏の可能性を一切衆生

が有しており、また一切衆生が有するものこそ仏性というべきであるとする『涅槃經』の思想は、大乘の原理を端的に明示したものといえる。しかるに論理的整合性のみが仏道の目的ではない。現に迷える衆生を濟度しうるか否か、曠劫の宿因を負つて差別の状況に生まれ生きる一切衆生を、平等に包摂しうるか否かが、実践的思想としての仏教の自己批判原理となるのである。

道綽の聖浄二門判においては、時代と機根との二要因をあげて、浄土門が末代の衆生の通入すべき路であると主張するが、法然はそれをうけつつ、弥陀の悲願として誓われた念仏往生は「正像末の三時及び法滅百歳の時に通ず」という。すなわち法然の選択の根拠は時代的要因ではなく、より根源的に人間存在を普ねく成就しうるか否かという所にあったといえよう。男女老少、貧富貴賤、下智高才を簡ばず、一切衆生を平等にうるおさんとする大悲本願を基準にとるがゆえである。しかも法然が見ている一切衆生とは、自己に代表される愚鈍下智の輩である。「戒定恵の三学」によつて智恵をえ、自らの努力で止観を修して自利他円満の仏果をえようとする聖道の教えに落第せる自己、「怯劣」にして罪根深き人間存在としての自己である。法然は当時、智恵第一を謳われ、持戒堅固と目され、一心金剛の戒師と仰がれた行人である。しかれどもその思想的批判は、深く人間存在の本質を見抜いて、

「浄土往生」を選びとつたのである。その動機の根本は「速かに生死を離れんと欲」する切なる解脱への要求である。「不住生死不著涅槃」という高度の実践テーマを法然が知らぬはずがない。しかし現実には迷妄深き生活の中に湧き出る生死解脱の希求は、「速」「今」として根源的解放の喜びが欲しいということである。浄土願生は、徒らに現在を諦念して未だに夢を托すものではない。現実の人間生活が苦惱深く罪障重きことを認知する身の中から、仏果円満の大悲が願力としてはたらく世界に触れたいとするところに、仏の浄土が願生せられるのである。その罪業深重の身の自覚は、単に個人的感傷や、個々の行為の反省的嫌悪感に止まらない。人間存在を蓋う五濁の現実、歴史社会の中に邪見を身につけて生きる衆生、その一切衆生を自覚するところに、平等に差別を超えて人間を成就せしめんとする本願力を信受するのである。一切衆生悉有仏性を理論的根拠とするに止めず、時処所縁を簡ばざる大悲心の現行を信受するのである。そこに法然が、人間的価値判断による真实性を選ばず、「仏の本願に依るが故に」という仏願の言葉を選びとつた主体的決断がある。本願の言葉を信ずるのは、自ら「偏依善導一師」というように、善導の教示による。善導においては、称名念仏は止観の行の一方便ではない。『観経疏』を「楷定古今」と自認して明らかにしたごとく、善導の読経眼は仏願の信受にある。「自身

は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して出離の縁あることなし」との自覚を通して、その宿業深き迷没の身を解脱せしめる道としての具体的方法は、仏願が誓う称名念仏であると信受したのである。

ここにおいて『起信論』にあつては「怯弱なる初心の凡夫」のための方便であつた念仏往生の道は、正に怯弱なる存在としての愚鈍なる自己にとつて、唯一の大乗仏道となるのである。本覚を立場として、方便を止むなく取るのでなく、自己認識を明白にして、抽象的合理的教説にまどわされない、凡愚なる自己の主体成就の道を選ぶのである。努力によって本覚に還りうるとするのが本覚思想の実践論の基底であるとするなら、そういう人間的努力の不実性と不平等性とを如実に自覚せよと語りかけるものこそ、浄土の教えであるということであろう。周知のごとく、法然の歴史的意義は「専修念仏」の宗義の樹立である。その思想的批判は、本願による自力的努力の迷妄の批判である。本覚を人間的努力の究極にあるものとするならば、如来正覚は、願生浄土の信の生活の中に感受せられる光明界である。正覚より語る大悲願心を根拠とするゆえに、法然の念仏往生は、現に男女貴賤を問わず、庶民に滲透して、凡愚の救いを具現していったのである。

〔昭和五十七年度文部省科学研究費による研究成果〕

（大谷大学助教授）